

## 子どもにことばが生まれるとき

あるテレビの番組で、幼児に対する言葉指導の様子が放映されたことがあります。そこでの指導はかなりレベルの高い厳しいことばの指導でした。その指導のVTRを視聴しながら専門家たちが話し合いをしたのですが、その厳しい指導に対して賛否両論が出され激しい議論がなされました。

その時、1人の解説者からヘレンケラーの人生を映画化した「奇跡の人」の話題が出されました。それは、食事の場面で癩癩を起したヘレンが、テーブルの上に並べていた食べ物を食器ごと投げ散らかす場面でした。サリバン先生はそれを許さず、厳しく投げ散らした食器をヘレンに片付けさせます。そして、その食器を水で洗わせるのです。その食器を洗う手の中に落ちてくる水の中にサリバン先生がwaterと指文字で書くのです。そのときクローズアップされたヘレンの唇がかすかに動いて、waterということばが生まれたのです。厳しいしつけの中で健気に片付けをしているヘレンにことばが生まれる感動的な瞬間です。まさにヘレンとサリバン先生に奇跡が起こったその瞬間です。この映画の最も感動的な場面といってもいいでしょう。製作者は障害のある子を甘やかすのではなく厳しくしつけをしていくことこそが、真のヒューマニズムであることをこのことばが生まれる場面で演出したのかもしれませんが、多くの視聴者はこの場面で感動し涙しました。ですから、映画としては、それは見事に成功したと言っていってもいいかもしれません。

しかし日頃子どもたちの身近なところで子どもたちと係わっている別の解説者は「私は、どうしてもその場面の説明には納得できません。しつけとはいいながら子どもがあのような厳しい立場に立たされ、はたしてことばが生まれるのであろうかという疑問を持ちます。子どもの成長の奇跡が、あのような否定的な場面で起こるだろうかと思いません。」と反論したのです。

後日、この解説者の予測が当たっていたことが解りました。

サリバン先生の記事によると、あの場面は長雨続きで外で遊ぶことができずにうんざりしていたヘレンをサリバン先生が雲の間から日が差し始めた戸外に誘い、久しぶりに心ゆくまで先生と一緒に遊ぶのです。外にはまだ水溜まりが残っています。先生と泥んこになりながら走ったり跳ねたり転んだりして遊んだのかもしれませんが。その遊びの中でヘレンの中にはことばにはならない声が止めどなく湧き出ていたようです。

ヘレンはサリバン先生と心ゆくまで遊んだ後、泥の付いた手足を洗ってもらうために水道のところに行き、サリバン先生にやさしく手足を洗ってもらったのです。その洗ってもらっている手に落ちる水の中に大好きなサリバン先生の手ぬぐいで書いてもらった、指文字のwaterだったのです。だからヘレンは先生と同じことばをサリバン先生に返したのです。ここで初めてヘレンにことばが生まれたのです。と日記に書かれ

ています。

これならば私も十分納得できます。子どもの奇跡というのは、このようにして起こるのです。子どもは自分を人間としてまるごと受け入れてくれる大好きな人に対する共感の表現としての「ことばを獲得する」のです。今回、東亜大学・純真短期大学客員教授、牧野圭一先生のお話を引用してこの雑感を書かせていただいています。

木田幼稚園では、知育教育を通してお子様に「ことばの獲得」を多面的から教えています。その中で、私は教師に「お子様に好かれ、尊敬される先生になる事。その為には本物になりなさい、本気で本心からお子様に向き合うのですよ。」と言いつけています。

お子様の知育が発達し、感情が育ち、お子様自身を表現できるのは、この「ことばの獲得」からに他なりません。幼児期から英語を、と言う先生や保護者もいますが、絶対にそんな事はありません。

母国語＝日本語の「ことばの獲得」を通してこそ、お子様はよろこびの中から深く成長します。どうぞ、本園の教師もお子様の「ことばの獲得」を通して必ず成長してまいります。どうぞご期待下さい。

木田幼稚園では漢字かな交じり文、論語、百人一首、名詩・名文の音読、そして漢字・ひら仮名・カタ仮名の書写文字指導などを通し、4年あるいは3年のカリキュラムでお子様は「ことば」を取得します。興味、関心のある保護者様は在園児に限らず、どなたでも見学する事ができます。よろしければ是非、おたずね下さい。

理事長